

郡山北工業高等学校創立四十周年記念式典
福島県高等学校長協会長 祝辞

平成二十八年十月十五日（土）十時
郡山北工業高等学校 第一体育館

ただいま御紹介いただきました、福島県高等学校長協会長を務めております安積高等学校長の久保田範夫でございます。県高等学校長協会（百名の校長さん）を代表致しまして、お祝いの言葉を申し述べます。

福島県立郡山北工業高等学校の
創立四十周年を心からお祝い申し上げます。

また、本日、感謝状・表彰状を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

本校は、昭和五十二年四月一日、当時、市内に二校あった工業高校、即ち現在あさか開成高校

が立地する桃見台にあった郡山工業高校と大槻の郡山西工業高校が統合、富久山町八山田地区内に移転・校舎が新築され、郡山北工業高校が産声を上げました。同じ日、郡山西工業高校の跡地に郡山高校が誕生し、四十周年を祝う式典が約一か月前の九月十七日に行われました。郡山工業高校は、戦時中の昭和十九（一九四四）年の開校ですから、そこから通算すれば七三年目で、郡山西工業高校は、昭和三十八（一九六三）年開校で、そこから通算すれば五四年目ということになります。ここ八山田の地での歴史は四十年ということになります。

本校が誕生した今から四十年前の昭和五十二（一九七七）年はどのような年だったのでしょうか。少し振り返ってみましょう。

この年、大学入試センターが五月に発足、その二年後から共通一次テストが始まり、現在の大学入試センター試験に続いています。七月には、第一回全国高等学校総合文化祭が千葉県で開催されましたが、本県でも、東日本大震災からわずか五か月後の平成二十三年八月に第三十五回大会が開催されたことは、皆さんの記憶に残っているのではないでしょうか。また、プロ野球の王貞治選手が七五六号ホームランを

達成し、国民栄誉賞第一回目の受賞者になったのもこの年でした。

さて、私は、新採用の、雪が三メートルも積もる只見高校時代から現在まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚えて歌えるように心がけてきました。それは、校歌の歌詞にはその学校の創立以来の校訓や精神、スピリッツが込められていることが多いからでありますし、また、校歌を声高らかに歌うことによつてその学校と生徒を好きになれるからであります。

本校の校歌も、学校創立の年、昭和五十二年十一月十七日、校歌制定記念式典で披露されたと聞いております。作詞の安西金造氏は、統合前の郡山西工業高校に勤務していた国語の教師であり、作曲の岩井直溥氏は、全日本吹奏楽コンクール課題曲六曲を作曲、「吹奏楽ポップスの父」と呼ばれ、昭和四十七（一九七二）年に創立された郡山吹奏楽団の名誉指揮者でもあった方であります。

さて、肝心の校歌ですが、先程、校歌の歌詞にはその学校の校訓や精神が込められていることが多いと申しましたが、本校の校歌もその例外ではなく、校訓の「調和 創造 特色」が

見事に読み込まれていると思います。

一番で「おお 調和の旗のもと」、二番で

「ああ 創造の意気高し」、そして三番で

「いざ 特色を發揮せん」と歌われます。

安積の沃野に槌音が高く響き渡り、

未来に向かって駆けて行く、駿馬の如き

郡山北工業高校の生徒諸君の姿が

浮かび上がってくるようではありませんか。

また、校訓はもとより、各高校が掲げる

「教育目標」にも特色が現れます。本校は、①
調和のとれた人間の育成、②創造力のある豊か
な人間の育成、③特色のある人間の育成、とし

ていますが、②創造力のある豊かな人間の育成
の「ウ 科学的開拓精神を養い、つねに新しい
ものの創造ができる実践力をもった人間の育成」
のところは本校らしさが最もよく現れていると
私は感じました。私が調べた限りでは、校訓や
教育目標に「開拓精神」という言葉があるのは、
約百校ある本県の高等学校の中で本校と安積の
二校だけです。因みに、安積は「開拓者精神、
質実剛健、文武両道」の三つを「安積の精神」
としています。本校は「科学的開拓精神」
であり、本校生徒の東北レベルから世界レベル
までの様々な活躍の秘密を解く鍵は、

この言葉にあるのではないでしょうか。

ところで、私たちが生きている時代は、もの凄いスピードで変化を続け、その流れは、加速度的に早くなっています。高校教育について言えば、近年の国による教育改革の動きからは目が離せない状況にあります。現在の中学二年生が、高校二年生になった段階で「高等学校基礎学力テスト」が始まり、平成三十二年度高校三年生で現在の大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト」（未だに仮称ですが）を受験することになるスケジュール

が想定され、接続部分を含め、高校と大学の教育改革を一体的に進める国の動きは、今までになく急ピッチで進んでいます。

中央教育審議会（答申）の「はじめに」には次のような記述があります。「生産年齢人口の急減、くグローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。」これについては、国内外で様々な研究がなされており、今後、十く二十年で約四十七%の仕事が自動化され、アメリカの小

学校に入学した子どもたちの六十五％は、大学卒業時に今は存在していない職業に就く、とも言われています。現在と変わらずに残る職業はあるとしても、新たな職業への柔軟な適応力と実行力が求められるのは間違いないと思います。

このような、もの凄い早さで流れていくグローバル社会、少子高齢社会を私たちは生き抜いていかなければなりません。

本校の卒業生は、約一万五千名を数え（前身である郡山工業の六、六三四名、郡山西工業の三、一七二名を合わせると二四、六八〇名）、

国内外の各界で活躍していると伺っていますが、先程述べたように、今後、職業そのものが大きく様変わりしていく状況に対応していくためには、皆さん自身の「科学的開拓精神」はもとより、各分野で常に先を読みながら新たな道を切り拓いていく気概を持った先輩の方々や地域の皆さんの支えは大きな力になるはずです。

そして、何といっても皆さんのクリエイティブな創造力インベンションを絶えず刺激し続けてくれる、そして面倒見のよい先生方が皆さんを導いてくれます。

郡山北工業高校の生徒の皆さん、校歌に歌われる、ここ八山田の地に翻る「調和の旗のもと」、

「創造の意気」を高くし、「いざ特色を發揮せん」の心意気を胸に秘め、そして、科学的開拓精神に裏付けられた、常に新しいものを創造していく実践力を身につけて自分の夢を見つけ、その夢に向かって、充実した高校生活を送ってください。そして、もの凄い早さで流れていくグローバル社会、少子高齢社会を生き抜く力を自分のものとしてください。

最後になりますが、十年後の五十周年、更にその先へ向けて新たな道を開拓していく郡山北工業高等学校の益々の発展をお祈り申し上げます。私からのお祝いの言葉といたします。

本日は、創立四十周年、誠におめでとうございます。

郡山北工業高校校歌

安西金造

作詞

岩井直博

作曲

(昭和52年11月17日 校歌制定記念式典で披露)

一 明け初むる 安積の沃野に

今 時到り 槌音高く

朝日に輝く 白亜の母校

これぞ

郡山北工業高等学校

おお 調和の旗のもと

我等 健児

ここに 朗らかに 集いけり

校訓

調和

創造

特色

二

暮れなずむ 飯豊^{いいで}の星を

低く見おろし 理想も遙か

八山田が丘 そびゆる学舎^{まなびや}

これぞ

郡山北工業高等学校

ああ 創造^{そぞう}の意気高し

我等 駿馬

永遠^{とわ}に 未来に 駆け行かん

三

残雪の 安達太良山^{やま}に

想^{おも}いも深く 拡がる都市に

不拔の根を張る 学びの高殿^{たかどの}

これぞ

郡山北工業高等学校

いざ 特色^{とくしき}を発揮せん

我等 学徒

真理 求めて いそしまん